

2026年3月22日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教76「道・真理・命」

イザヤ35：5～8、ヨハネ14：1～7

「わたしが行く所にあなたたちは来ることができない」(33節)とイエスさまはおっしゃいました。この言葉は、ヨハネ福音書を読み解く上で重要な鍵となる言葉です。イエスさまはどこへ行かれるのでしょうか。それは父なる神さまのもとです。第16章でイエスさまは「わたしは父のもとから出て、世に来たが、今、世を去って、父のもとに行く」(16：28)と言われます。ここにイエスさまの目的があるのと同時に、わたしたちの目的があります。イエスさまは、わたしたちを父なる神さまのもとへ連れ帰るために、この世に来られました。わたしたちを神さまのところへ導くために、神さまがわたしたちと同じ肉体を受けて、まことの人となりました。そのようにしてわたしたちの存在を神さまはお引き受けになられます。イエスさまは十字架でわたしたちの罪を贖い、三日目によみがえられ、天に昇られます。それはイエスさまお独りのことではありません。イエスさまに結ばれたわたしたちもイエスさまと共に父のもとへ、神さまのもとへ行くのです。イエスさまがその道を備えてくださいました。

神さまのところに行く。そこにわたしたちの生きる目的があり、神さまに造られた人間としての本来の姿があります。それは神さまが人間をお造りになられて「極めてよかった」(創世記1：31)と言われた状態、エデンの園で神さまと共に生きている状態です。しかしその祝福された関係は長く続きませんでした。ご存知のようにアダムとエバは神さまとの約束を破り楽園を追放されてしまいます。そこから人間の罪の歩みが始まりました。わたしたちが互いに愛し合うことができないのはそのためです。ユダの裏切りもペトロの離反も、また繰り返起こる戦争も、わたしたちの日常に起こる諍いも、その根にはすべて罪があります。神さまと通じ合えなくなった。だからわたしたちも互に通じ合えないのです。「わたしが行く所にあなたたちは来ることができない」(13：33)とは、そういう本来の生きる目的を失った人間の姿を表していると言ってもよいでしょう。

自分の人生がどこに向かっているのか。人生の本当の目的を見出せなくて悩む人はとても多いのです。何のために生きるのか。何のために働くのか。目的を見出せず、ただ漠然と生きている。幸せな老後を夢見て一生懸命働いて来たけれど、ふと虚しさを感じることもあるかもしれない。人生は思い通りにいかないことばかりです。家族の死に直面する。病気になる。突然、災害が起こって生活が一変することもある。いつ戦争が起こってもおかしくない世の中です。自分はどこへ行くのか。この世界はどこへ行こうとしているのか。わからないままでは確かに恐ろしいことなのかもしれません。

けれどもイエスさまは言われます。「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える」(14：1～3)イエスさまがわたしたちを父なる神さまのもとに迎えてくださるという約束です。ここはよく葬儀の時に読まれるところかもしれませんが。確かに愛する者の死に直面してわたしたちは心騒がせるでしょう。けれどもイエスさまが十字架とよみがえりの御業によって、帰るべき場所を用意してくださりそこに迎えてくださる。それは慰め以外の何ものでもないでしょう。

そして、このことは単に死んだ後どうなるかという問題だけではありません。わたしたちの本来の生きるべき命、神さまの子どもとしてこれから生きていく新しい命のことが言われています。それはわたしたちが罪ゆえに失っていた樂園、神さまと共に生きる命です。そこにイエスさまが迎えてくださる。イエスさまによって、わたしたちの人生はそうのように導かれ完成されるのです。どんなに間違ってしまった、思い通りにならない人生でも、わたしたちは自分の力でその道を修正して行くではありません。イエスさまご自身が道となられ、十字架とよみがえりの御業によって、罪を赦し、神さまのところに行けなくなっていたわたしたちを神さまのもとへ導いてくださいます。

「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」(6節)とイエスさまはおっしゃいました。イエスさまご自身が神さまに向かう道であり、救いの真実、真理であり、神さまと共に生きる命そのものです。そのイエスさまに結ばれる、つながることが何より重要なことです。この後でイエスさまは、有名なぶどうの木の話なさいました。「わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている」(15:4) イエスさまとつながるために、わたしたちは洗礼を受けます。洗礼を志願している方のことを昔から教会では道を求めると書いて「求道者」と呼びます。ここでいう道とは、救いに至る道のことですが、何よりイエスさまご自身のことでもあります。道であるイエスさまを求め、イエスさまと一つになって、わたしたちは神さまのもとへ行くのです。イエスさまご自身がその道になってくださった。イエスさまにつながってさえいれば、人生の目的は自ずと定まってきます。その先には、神さまと共に生きる将来が約束されています。

先週は、鹿児島教会の九州連合長老会への加盟式が行われました。鹿児島教会は1878年に伝道所が設立され、今年で148年、再来年は150周年を迎えます。150年、おびただしい人たちが信仰に導かれイエスさまにつながりました。それはイエスさまの道を走り続けた150年です。教会に生きた人々は、その先にある終末の完成を望み見ながら、イエスさまの道を走り抜け次の世代にバトンを託しました。そこに希望があります。

春のセンバツ高校野球が行われています。開会式の選手宣誓はとても印象深い言葉でした。宣誓をした高校の先輩が16年前にやはりセンバツで選手宣誓をしたそうです。その先輩の指導を受けて来た自分が今こうして同じ役目を務めていることに触れて次のように言いました。「夢は一人のものではなく、人から人へと受け継がれ、未来へとつながっていきます・・・こうしてつながっていくわたしたちの夢が平和の上に成り立っていることを忘れず、ともに戦ってくれる仲間、ここまで育ててくれた家族、そして夢をつないでくれた先輩たちへの感謝の気持ちを胸に今、この時、この日をいつまでも大切に忘れずに、威風堂々と戦い抜き、次の世代の夢となることを誓います。」夢は一人のものではなく、人から人へと受け継がれ、未来へとつながって行く。信仰も同じです。何よりも神の国へ続く道であり、真理であり、命であるイエスさまにつながることによって、わたしたちもまた終末の完成を望み見ることができるのはまことに幸いなことです。

天の父よ。自分で救いの道を切り開いて行くのではなく、イエスさまが道であり、真理であり、命となって、わたしたちを父のもとへ導いてくださる幸いを感謝します。弱いわたしたちです。どうぞこのイエスさまにつながって信仰を最後まで全うして行くことができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。